

小学校通常学級における相互依存型集団随伴性に基づく支援に関する研究：学級全児童の学習準備行動及び援助行動への効果

著者	岩本 佳世
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2018
報告番号	12102甲第8775号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153929

氏 名	岩本 佳世			
学 位 の 種 類	博士（障害科学）			
学 位 記 番 号	博甲第 8775 号			
学位授与年月	平成 30年 5月 31日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	小学校通常学級における相互依存型集団随伴性に基づく支援に関する研究 —学級全児童の学習準備行動及び援助行動への効果—			
主 査	筑波大学教授	博士（教育学）	園山 繁樹	
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	柘植 雅義	
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	野呂 文行	
副 査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司 一子	

論文の内容の要旨

岩本佳世氏の博士学位論文は、小学校通常学級において相互依存型集団随伴性に基づく支援を適用し、発達障害児童等を含む学級全児童の学習準備行動及び援助行動への効果、並びに漢字テスト成績への波及効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第1章で著者は、小中学校の通常学級における相互依存型集団随伴性に基づく支援に関する先行研究を検討している。まず、通常学級における相互依存型集団随伴性に基づく支援の現状と課題について論じ、次いで、発達障害児童を含む学級全児童の学習関連行動の変容とスクリーニング機能、最後に、学級全児童の学習関連行動の変容と学業成績への波及効果について論じている。

第2章で著者は本研究の目的として、先行研究のほとんどが米国のものであることから、わが国の小学校通常学級において相互依存型集団随伴性に基づく支援を複数の通常学級で適用し、発達障害児童を含む学級全児童の学習準備行動への効果を検証すること、学級全児童の学習準備行動の改善によって漢字テスト成績への波及効果が認められるかどうかを検討すること、学級全児童の援助行動の変容が低成績児童の漢字テスト成績に影響を及ぼすかどうかを検討すること、を挙げている。

第3章で著者は、研究1として「相互依存型集団随伴性に基づく支援による自閉スペクトラム症児童を含む学級全児童の朝の準備行動への効果とスクリーニング機能」について記述している。研究1では、小学3年の通常学級3学級において、朝の始業前の時間における学習準備行動に対して相互依存型集団随伴性に基づく支援が適用された。3学級とも自閉スペクトラム症児童が1名ずつ在籍していた。相互依存型集団随伴性に基づく支援は、学習準備行動について児童が記録した評価に基づいて担任が報酬（例えば、担任と一緒にドッジボールができる券）を提示し、グループ（生活班）全員が4つの準備行動を遂行した場合に、グループ全員に報酬が与えられた。結果として、朝の学習準備行動の改善が3学級いずれでも見られた。1名の自閉スペクトラム症児童については

個別支援を追加することで学習準備行動が改善した。これらの結果について著者は、米国での先行研究の結果がわが国の小学校でも再現されたと考え、また集団随伴性による支援のみでは改善が見られない児童が抽出され、個別支援が必要な児童のスクリーニング機能ももつと考察している。

第4章で著者は、研究2として「体育科授業の集合・整列場面における相互依存型集団随伴性に基づく支援による発達障害・知的障害児童を含む学級全児童の準備行動への効果とスクリーニング機能の検証」について記述している。研究2では小学4年の通常学級3学級において、体育科授業の集合・整列場面で相互依存型集団随伴性に基づく支援を適用し、集合・整列等の学習準備行動に対する効果を検討している。授業には発達障害児童と知的障害児童計7名が参加していた。結果として、在籍全児童の学習準備行動が改善したが、自閉スペクトラム症児童1名については研究1と同様に、個別支援を追加することで学習準備行動の改善がもたらされた。ベースライン期で学習準備行動が生起していなかった児童については、すぐに個別支援を導入することで効果が見られた。

第5章で著者は、研究3として「相互依存型集団随伴性に基づく支援による発達障害・知的障害児童を含む学級全児童の学習準備行動への効果と漢字テスト成績への波及効果に関する予備的検討」について記述している。研究3では、小学5年の通常学級3学級において、始業前の朝学習開始時に鉛筆と消しゴムを準備することに対して相互依存型集団随伴性に基づく支援を行うとともに、漢字学習時の援助行動にトゥートリング手続きを適用した。併せて、支援前後の漢字テスト成績を比較し、これらの支援手続きの波及効果を検討している。結果として、3学級ともに相互依存型集団随伴性に基づく支援の導入により学習準備行動が促進されたが、必ずしも漢字テスト成績の向上にはつながらなかった。一方で、援助行動の増加が認められた。

第6章で著者は、研究4として「相互依存型集団随伴性に基づく支援による学級全児童の援助行動の変容に伴う低成績児童の漢字テスト成績への波及効果」について記述している。研究4では、小学5年の通常学級2学級において、始業前の自習時間の児童相互の援助行動の報告に対して相互依存型集団随伴性に基づく支援を適用し、援助報告への効果、課題従事行動、援助行動、及び漢字テスト成績への波及効果を検討している。結果として、2学級ともに特別な教育的ニーズを有する児童を含む全児童の援助報告が増加した。また課題従事行動と援助行動にも増加が見られた。漢字テストの低成績児童については、漢字テスト成績が向上し一定の波及効果が見られた。

第7章で著者は、総合考察を以下のようにまとめている。研究1と2の結果から、学習準備行動に対する相互依存型集団随伴性に基づく支援によって学級全児童の行動変容が促進され、一部の発達障害・知的障害児童に関しては追加の個別支援が必要とされ、また集団随伴性に基づく支援が行動的なスクリーニングとして機能しうることが示唆された。研究3と4の結果から、学習準備行動に対する相互依存型集団随伴性を中核とした学級全体への支援では漢字テスト成績への波及効果が見られないが、援助報告に対する相互依存型集団随伴性に基づく支援によって低成績児童の漢字テスト成績に波及効果が見られることが示唆された。最後に著者は、本研究の制限と課題について、学校規模の異なる小学校での検証等を挙げている。

審査の結果の要旨

(批評)

岩本佳世氏の博士学位論文では、相互依存型集団随伴性に基づく支援を小学校の複数の通常学級に適用し、発達障害児童を含む学級全児童への学習準備行動への効果、及び漢字テスト成績への波及効果や援助行動への効果が検討され、学習準備行動や援助行動への明確な効果が実証された。わが国の特別支援教育においては通常学級での特別な教育的ニーズを有する児童への支援が重要な課題とされ、本論文は特別支援教育実践に有益な研究知見をもたらしたものとして高く評価される。また、各研究は研究協力校や担任教師等の協力を得て長期にわたって実施されたものであり、その点でも教育実践に直接貢献する研究成果として評価できる。

平成30年3月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。